

日本近世美術研究 第六号

日本近世美術研究 第六号

一般財団法人 北島古美術研究所

Volume 6.

2023

Contents

The Historical Position of Tani Bunchō's "True View of the Feast at the House of Shibano Ritsuzan": Focusing on Elegant Gathering and Farewell Iconography Traditions

FUJIWARA Kanta , NAKAMURA Manami 1

On the Relationship between Penglai and Turtle in Chinese and Japanese Mirrors  
ISHITANI Makoto 47

A Study related to The Teachings of Zhu Xi, of Wall and Sliding Door Paintings on Yokendo, the Sendai Clan School : Focusing on "Kato" and "Rakusyo" by Toyo Azuma

YASHIMA Shin 73

The ceiling painting of Unryu-zu (Oriental Dragon in Clouds) by Tsurusawa Tansen at Sonyoin, the tatchu of Honpoji Temple:  
The Great Kyoto Fire of the Tenmei era in 1788 and Restruction by Yagura Kyuuemon Yasumitsu

SUGIMOTO Yoshihisa 109

Bulletin  
of  
Kitajima Institute of Old Works Art  
"Nihon Kinsei Bijyutu Kenkyu"

谷文晁筆「対嶽楼宴集当日真景図」(広島県立歴史博物館蔵)の史的位置  
— 雅集図・送別図の伝統に照らして — 藤原 幹大・中村 真菜美

蓬菜と亀  
— 中近世和鏡の蓬菜紋の成立に寄せて — 石谷 慎

仙台藩校・養賢堂障壁画の朱子学による考察  
— 東東洋筆「河図図」「洛書図」を中心に — 八島 伸

鶴澤探泉筆本法寺塔頭・尊陽院の天井画「雲龍図」について  
— 天明の大火と矢倉九右衛門安盈による復興 — 杉本 欣久

日本近世美術研究

第六号

日本近世美術研究 第六号

目次

〔招待論文〕

谷文晁筆「対嶽楼宴集当日真景図」(広島県立歴史博物館蔵)

の史的位置 — 雅集図・送別図の伝統に照らして — …… 藤原 幹大・中村 真菜美 1

〔招待論文〕

蓬萊と亀 — 中近世和鏡の蓬萊紋の成立に寄せて — …… 石谷 慎 47

〔査読論文〕

仙台藩校・養賢堂障壁画の朱子学による考察…… 八島 伸 73

— 東東洋筆「河図図」「洛書図」を中心に —

鶴澤探泉筆本法寺塔頭・尊陽院の天井画「雲龍図」について…… 杉本 欣久 109

— 天明の大火と矢倉九右衛門安盈による復興 —

## 【投稿規定】

- ・投稿資格は、基本的に大学（修士相当以上）で美術史に関する専門的な教育を受けたか、美術館・博物館もしくはその他研究施設に籍を有したことがある者とする。
- ・投稿内容は「論文」と「資料紹介」を主とし、日本の近世美術を中心とした江戸時代の文化に関する未発表のものとする。いわゆる「焼き直し」や「サラミ論文」は認めない。
- ・原稿量について、「論文」は本文を8000字（400字詰20枚）以上とし、特に上限を設けない。「資料紹介」は内容に応じるものとする。
- ・本文はデジタル原稿とし、必要な図版とともに、毎年八月末日までに編集責任者に提出する。
- ・写真掲載に関しては、執筆者が責任をもって許認可を得ることとする。
- ・「査読論文」の掲載可否は、査読委員の合議によって決定する。
- ・「招待論文」は常勤職として3年以上、また研究歴が10年以上ある投稿者に限定し、編集責任者が査読を行い、下記の基準を満たしているかと判断したものに關して掲載を認める。

## 【査読基準】

- ・評価は以下の三点を基準として行う。
  - 一 テーマ選びの妥当性↓有用性（意義）と新規性の充足
    - a 有用性（意義）↓真理探究の精神に基づき、日本の近世美術に関する歴史観の構築に寄与したか。
    - b 新規性↓学術研究の蓄積に対し、新たに得られた内容があったか（以下のいずれかを求める。）
      - 1 新たな歴史観の提示（既存の評価と異なる視点や解釈）
      - 2 新資料の紹介と歴史的位置づけ
      - 3 既知資料の新解釈
  - 二 論述内容の妥当性↓論理性の担保
    - a 反証と論証（証明）の充実
    - b 作品論と資料論のバランス
  - 三 論述形式の妥当性↓プレゼンテーションの充実
    - a 章立て（「はじめに」と「おわりに」を含む）の適切さ
    - b 文章の平明さ
    - c 本文と註のバランス
    - d 資料引用や註の公平性
- ・査読委員の選任をはじめとした査読に関する全責任は、編集責任者が一切を負う。
- ・査読委員は編集責任者に加え、内容に応じた外部の専門家二名に委嘱する。
- ・掲載の可否は、その理由とともに執筆者に伝えることとし、掲載論文のみ、査読者および掲載理由を公表する。
- ・査読委員が論及作品の資料性に問題があると判断した場合、その使用を認めないことがある。
- ・作品や文献に關し、査読委員が別資料を把握している場合には、その情報を提供したうえで反映を求めることがある。
- ・第三者に伝えるための文章であることを考慮し、文体や専門用語の使用について再考を求めることがある。

【編集後記】

今号から新たに【招待論文】のカテゴリーを設けることとなった。黒川古文化研究所におけるかつての同僚で、中国考古学を専門とする石谷慎氏から、自身の研究を日本美術史の研究者とも共有したいとの好意で寄稿いただいた。一方、美術史学会等で面識のあった三井記念美術館の藤原幹大氏から、取り組んでいる研究が他研究誌の字数制限内に収まらないとのことで、本誌投稿のご相談を受けた。ともにすでに研究者としての実績がある方で、初学者と同様に三名の査読を経る必要もなかるうと思う一方、そのまま受け付けて掲載するのは本誌の主旨に反し、これを前例とすれば今後のレベル維持も難しくなるのではないかと考えた。そこで編集責任者がまずは査読を行い、本誌の意向に沿うかたちで二―三度ほど修正や訂正を重ねていただいたうえで、「招待」としての体裁で掲載することとした。適切な査読であったかどうかは読者の判断に委ねたいと思う。

石谷氏の論考は、現在にまで受け継がれる「蓬萊紋（図・文様）」についての変遷を追跡している表現について、鏡を中心とした作品と文献資料を分析し、中国の古代から日本の中近世に至る流れを論述する。江戸時代の作品を研究する場合でも、画題の起源が中国にあるとするなら、その淵源を辿って歴史の変遷を把握するのがあるべき姿勢であろう。それゆえ、本来であれば美術史研究者が行なう必要のある課題を、中国考古学の立場から提示してもらった内容となっている。「トンネル」は両側から掘り進めて開通させるべきであり、むしろ我々にボールが預けられたかたちとなったわけである。

藤原氏と中村氏による論考は、谷文晁による「対嶽楼宴集当日真景図」を足がかりとし、ミクロとマクロ両視点により、江戸時代における文人の交流を論じる内容である。外来語の「サロン」では表現しきれない東洋特有の交流を明らかにする試みであり、多様に繰り広げられた「雅集」の状況をひとつの論考にまとめた。情報量は多いものの、藤原氏と中村氏の分担によってひとつの論考にまとめているため、思いのほか読みやすい。かつて本図について「もの珍しそに富士山を眺めるのが茶山であろう」と、軽々に書いてしまった誤りも正していただいている。江戸時代の交流は画家のみに終始するわけではなく、むしろ漢学者や僧侶が主体となっている場合も多い。彼らが残した漢詩文集の分析は不可欠であり、それらを読みこなすためにも漢文に対する素養が必要となる。データベースやネット検索の発達により、以前よりもはるかに情報収集は容易となったが、一方でそれらの情報を結び合わせ、正しい文脈で解釈するためにはいっそうの深い教養が求められる時代となった。つまりはそれらの文化を生み出した人々の精神をわしづかみにするような、人間そのものに通底できる能力が美術史研究者にも求められるが、そこにひとつの先鞭をつける内容といえるだろう。

最後に査読論文である八島伸氏の論考は、奇しくも石谷氏が対象とした霊亀に関する「河図洛書」を主題とし、日本の近世側から提示する内容となった。その評価については、末尾に掲載した査読総評をご覧いただければ幸いである。

【執筆者略歴】

藤原 幹大（ふじわら・かんた）  
一九九〇年、兵庫県生まれ。二〇二〇年九月、名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程（美学美術史学）満期退学。二〇二〇年六月より、三井記念美術館学芸員として勤務。  
論文に「長沢芦雪「西園雅集図」について―画面の文学的典拠との関係を中心に―」（『美術史』第一八六号、二〇一九年）などがある。

中村 真菜美（なかむら・まなみ）  
一九九二年、大阪府寝屋川市生まれ。二〇一九年三月、大阪大学大学院博士後期課程（文化表現論）日本・東洋美術史専攻 修了。二〇一九年四月―二〇二〇年三月、大田区文化財担当として勤務。二〇二〇年四月より、石川県立歴史博物館学芸員として勤務。  
論文に「谷文晁筆「東海道勝景」（永青文庫蔵）の制作について」（『美術史』第一八五号、二〇一八年十月）などがある。

石谷 慎（いししたに・まこと）  
一九八八年、岐阜県岡崎市出身。二〇一七年三月、京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻博士後期課程研究指導認定退学。二〇二一年一月、同大学院

文学博士を取得。二〇一五年から二〇二二年まで公益財団法人黒川古文化研究所に研究員として勤務。二〇二二年より京都府立大学文学部共同研究員。  
著書に「秦漢遺宝―器物に込めた願い」（黒川古文化研究所研究図録シリーズ6、二〇一九年）、論文に「中国古銅器の蒐集と做古・偽古」（『洛北史学』第二十五号、二〇二三年）などがある。

八島 伸（やしま・しん）  
二〇〇一年、宮城県丸森町生まれ。二〇二三年三月、東北大学文学部人文社会科学卒業。同年四月、東北大学大学院人文科学研究科総合人間学専攻（東洋・日本美術史専攻）博士課程前期に入学。

杉本 欣久（すぎもと・よしひさ）  
一九七三年、京都市生まれ。一九九八年三月、早稲田大学大学院文学研究科芸術学（美術史）専攻修士課程修了。同年四月より、公益財団法人黒川古文化研究所に勤務。二〇〇九年三月、早稲田大学にて博士（文学）の学位を取得。二〇一八年四月より、東北大学大学院文学研究科の准教授として日本近世絵画史を研究。著書に「鑑定学への招待―「偽」の実態と「観察」による判別（中央公論美術出版、二〇二三年）ほか。

日本近世美術研究 第六号

令和五年（二〇二三）十二月二十五日

発行 一般財団法人北島古美術研究所  
京都市上京区石薬師町六八九―八

編集責任 東北大学大学院文学研究科  
准教授 杉本欣久  
千九八〇―八五七六 仙台市青葉区川内二七―一  
電話 〇二二―七九五一六〇六八（直通）

印刷 株式会社東誠社  
仙台市宮城野区岡田西町一―五五 仙台総合印刷団地  
電話 〇二二―二八七―三三五一